

氏名(本籍)	たか はし とも ひこ 高橋智彦(東京都)		
学位の種類	博士(経営学)		
学位記番号	博甲第2728号		
学位授与年月日	平成13年11月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	経営・政策科学研究科		
学位論文題目	日本の銀行業の展開と効率性		
主査	筑波大学教授	工学博士	椿 広 計
副査	筑波大学教授	経営学博士	小 倉 昇
副査	筑波大学教授	Ph. D. (ファイナンス)	加 藤 英 明
副査	筑波大学教授	工学博士	鈴 木 久 敏
副査	筑波大学教授	学術博士	門 田 安 弘
副査	横浜国立大学教授	経済学博士	米 澤 康 博

## 論文の内容の要旨

1990年代に日本の金融業が背負った不良債権の問題は、銀行の貸出行動に少なからぬ影響を与えるとともに、結果として銀行経営の効率性にも大きな影を落とし、近年の銀行再編成という産業構造を大きく転換する動きへと発展してきた。

本論文では、不良債権を抱えた1990年代の日本の銀行に焦点を合わせ、不良債権問題に対する銀行の経営行動を多面的に分析している。まず、第2章では、不良債権と銀行貸出低迷との関係を分析するために、それぞれ貸出供給曲線と貸出需要曲線を仮定したモデル式を提示し、1994年から96年の我が国の銀行のデータをそれに当てはめることによって、貸出低迷の主要因が貸出供給者である銀行の経営行動にあるのか、需要者である借り手側の市場行動にあるのかを検証した。その結果、1990年代中頃には、貸出低迷の主要因は需要側にある可能性が高いことが示された。

さらに、第3章以下において、不良債権の保有と処理が銀行の経営の効率性に与える影響についてDEA(包絡分析法)を用いて測定しようとしている。DEAは、複数の投入要素と産出物を持つプロセスの相対的な効率性を求めることができるが、銀行の財務的効率性の測定にDEAを適用した先行研究は少なく、まず、第3章において、銀行にDEAを応用した基本モデルの有効性を検証した。特に、入力変数のひとつに貸倒引当金繰入額を取り入れることが、1990年代後期の日本の銀行についての分析では有効であることを示した。第3章で検証したモデルを用いて、第4章では、近年の銀行の合併・統合の効果を分析した。この分析の結果、銀行の合併・統合は直接的には不良債権処理の有効な対策になっていないという結論を導いた。

最後に、第5章では中央銀行である日本銀行の役割に目を向け、1998年に改正された日銀法による中央銀行改革の評価を行った。98年の改正によって中央銀行の政府からの独立性が高くなったことが、マクロな経済政策には有効に働いたことを物価指数を用いて検証した。

## 審査の結果の要旨

本論文では銀行の産出物の定義およびその生産関数に関する先行研究の詳細なサーベイに基づき、銀行の効率性の分析を、貸出市場の観点（第2章）、コスト効率性の観点（第3・4章）、政策の観点（第5章）のそれぞれから多面的なアプローチを試みており、個々の研究としては独自性のある結論を導いている。しかし、それぞれの章における銀行の機能について一貫性がなく、また、別個に導出された結論を比較検討する作業も不十分である。

また、各章の実証分析が、異なる年度のデータに基づいて行われている点も、結論の比較可能性の観点から不十分さを残していると思われる。この点については、著者が指摘するように、1990年代の銀行再編成の影響を受けて、実証分析の条件を満たす一貫したデータを得られる年度が限られているという事情も考慮すべきではあるが、各章が断片的な結論を与えるに留まっているという観は免れない。

以上のように、論文全体としての統合性には不十分さを感じるものの、個々の章の研究は先行研究の至らぬ点を新しい手法で埋める積極的な試みを行っており、本論文の学会への寄与は高いと思われる。

よって、著者は博士（経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。